

「教えて米子城」スペシャル・シンポジウム

《隠れたる名城 米子城 ―その価値と魅力に迫る―》

・日 時 平成28年1月23日(土)

13:00~16:30

・場 所 米子市公会堂(大ホール)

●第2部 パネルディスカッション

「隠れたる名城米子城―その価値と魅力に迫る―」

- ・パネリスト 佐藤正知 氏(文化庁主任文化財調査官)
中井 均 氏(滋賀県立大学教授)
金澤雄記 氏(米子工業高等専門学校助教)
国田俊雄 氏(山陰歴史館館長)
- ・コーディネーター 中原 斉 氏(鳥取県埋蔵文化財センター所長)

○司会 それでは、第2部を始めます。

第2部は、パネルディスカッションです。「隠れたる名城米子城―その価値と魅力に迫る―」というテーマでパネルディスカッションを行います。

それでは、パネルディスカッションのコーディネーター役、進行役の先生をご紹介します。本日の進行は、鳥取県埋蔵文化財センター所長の中原斉先生です。

中原先生、どうぞお入りください。(拍手)

よろしく願いいたします。

それでは、パネリストの皆様をご紹介します。

先ほど基調講演をいたしました文化庁主任文化財調査官、佐藤正知先生。どうぞお入りください。(拍手)

同じく基調講演をいただきました滋賀県立大学教授、中井均先生。どうぞお入りください。(拍手)

地元の研究者として、米子工業高等専門学校建築学科助教、金澤雄記先生。どうぞお入りください。(拍手)

米子市立山陰歴史館館長、国田俊雄先生です。どうぞお入りください。(拍手)

本来ならお一人ずつご紹介申し上げるところでございますが、中原先生、金澤先生、国田先生のプロフィールにつきましては、資料の3ページをごらんください。

それでは、中原先生、よろしく願いいたします。

○中原氏 皆さんこんにちは。これからパネルディスカッションを始めさせていただきます。佐藤さんと中井さん、お二人の熱い熱いお話で、今日はとっても外が寒いと思うんですが、皆さん、だいぶ温まってきたところじゃないかなと思います。

これから本日のテーマであります「隠れたる名城米子城ーその価値と魅力に迫るー」ということでのパネルディスカッションを、おおむね1時間、60分行わせていただきたいと思います。

プロフィール等につきましては、先ほども申しあげましたように、資料の方をご覧いただけたら、パネリストの方たちの役割というのがおおむねわかるのではないかなというふうに思います。

最初に、趣旨を説明させていただきます。中井さんのお話の中に、今、お城がおもしろいというお話がありました。どうも中井さんの時代は、とても変わり者の少年だったようですけれども、今はお城が好きだっていうのは公言できるような時代になってきたようです。「お城めぐリスト」であるとか、「城ガール」っていうのですか、ブログであるとか、お城マニアの芸能人の人が全国のお城を案内するというようなテレビ番組とかもよく見ます。また、先ほど紹介がありましたように姫路城の平成の大修理が行われて、オープニングには空をブルーインパルスが飛んでいました。お隣の近いところでは松江城の国宝指定、5番目の国宝天守ということになりました。また、鳥取の東側の但馬地方、本当に山の中なのですけども、その但馬の天空の城、竹田城に何十万人という人が訪れるという、非常に話題も多いわけです。

では、何でこんなにお城のブームが今、来ているのか。今日客席においでになった皆さんも交えて、お城のどこにそんな魅力があるのかということ、これからお話させていただきます。

初めに、私の方で少し追加整理をさせていただきますと思いますが、今日は米子城の基調報告というのが実はなされておられません。ロビーの方にいろんな展示がなされておりますけども、非常に大ざっぱに米子城の歴史の整理をさせていただきます。

27ページ、お手元の資料をお開きいただけますでしょうか。国田さんがつくられました米子城、米子町の関連年表の上の米子城というところで、左に年代、年号が書いてあって、右に出来事が書いてあります。もしお手元にペンをお持ちの方がいましたら線を引いてもらいたいです。まず真ん中ぐらいですね、1585年と1591年の間、ここに1本横線を引いてやってください。それから2つ下りて、1591年と1600年の間、それから、だいぶ下の方になります、1609年と1631年の間、そして最後に、1852年と1868年の間に1本線を引いていただければと思います。

そうすると、今、線を4本引きましたので5区画に分かれました。いちばん上が、いわ

ゆる戦国時代であります。中井さんの本来ご専門という時代だと思います。2番目のところが、先ほどから話に出てきた吉川^{きつかわ}広家ですね、毛利元就の孫になります。吉川氏の時代。その次が、中村一忠という、もともと豊臣大名ですけども、中村氏の時代。そして、幅が狭くなるんですが、池田氏の時代ですね、鳥取池田家が因伯2国を支配して、米子には荒尾の殿様がいた時代。そして明治時代ということになります。このように、米子城というのは変遷を続けている。この幅の違いが何かを物語っているような気はいたします。

それでは、米子城の大きな流れを頭に入れていただきましたところで、早速、パネルディスカッションのテーマの方に入らせていただきます。

今日は2つのテーマでお話をさせていただきます。いちばん大きなテーマは、米子城の価値と魅力は何か。これを「探る」というキーワードで話をしたいと思います。2番目のテーマが米子城をどう保存活用をすべきか。「磨く・楽しむ」をキーワードとさせていただきます。この2つのテーマについて、今日はパネリストの皆さんのお話を聞いていきたいと思います。

最初に、城郭として、先ほど中井さんのお話の中に、お城というのは軍事施設だというお話がありました。お城の軍事施設というところでのお話をさせていただきます。

そして今日は、会場からご質問をいただきました。ちょっと私の机の上、整理がつかなくなっています。パネルディスカッションでこんなたくさんのご質問を頂戴したことは正直言ってありません。2つか3つ、多くても10ぐらいの質問を整理すればいいんですけども、今日はとてもじゃないが、これを全部やっていたら夜中までかかってしまいます。ということで、とても無理なのですけども、その中からできる限り紹介していきたいと思っています。

じゃあまず、この質問からさせていただきます。まず「米子城、^{えびじょう}江美城、^{とだじょう}富田城とかの関係のお話を中井さんにお問い合わせしたい」という質問がありました。ここに江美城がでてきたのですけれども、米子城が鳥取城、松江城よりも歴史が古いんじゃないかというお話があったと思います。米子城の城郭としての評価、重ねて中井さんにまとめていただければと思います。

○中井氏 米子城っていうのは江戸時代も城として存続している。実は藩ではないんですけども、一国一城令の中で伯耆の国の城として存続してるわけですね。この一国一城令っていうのは元和元年、1615年に出るわけですが、それ以前は支城、つまり、本城支城体制で、領国の中で押さえておかないところには城をつくっていたわけですね。

とりわけ重要なのは、僕は慶長5年の関ヶ原の合戦で入ってきた新しい大名たち、彼らがそれまでの国の支配をするわけですから、さまざまところで武家の、旧国人たちの一

揆なんかに遭う可能性があるので、支城というのをつくります。恐らくこの伯耆では、やはりいちばんそれを問題にしなればいけないのは、中村段階ですなかむらかずただね、中村一忠が入ってきたときに米子を伯耆の本城にして、それ以外に幾つかの支城をつくっていくということですね。恐らく江美っていうのもそのあたりで存続してたんだろうと思います。

ちょうど私は今、お隣の出雲でそれをちょっと研究しているんですけども、堀尾が入ってきたときに、富田に入りますけれども、松江城をすぐつくる。その後、三刀屋とか、赤名瀬戸山とか、三沢というところにやっぱり支城をつくるんですね。ですから、伯耆も、伯耆一国を中村一忠が賜ったときに幾つかの支城をつくっているということになります。

さらにおもしろいのは、その支城が、今度は鳥取藩になったときの鳥取藩の自分手政治のときの、家臣っていいですかね、池田の家臣たちがその自分手政治をするところになっていくということになります。ですから、本支城体制の中で江美なんていうのは考えていかなければいけないだろうというふうに思っています。ただ、あそこ、実は金箔瓦が出てくるんですよ。江美城の金箔瓦っていうのはどう考えていけばいいのかっていうのが、今、私たち、割と城を研究している人間たちの課題にはなっています。そういう、関ヶ原合戦後の本支城体制っていうのが非常に重要なんだろうというふうに思います。

○中原氏 ありがとうございます。

実はお城っていうのは、非常にたくさんあったんですね。中世の城郭から含めたら鳥取県内に500というお城があって、それがだんだんだんだん収れんされていくんですけども、池田家の体制の中で因幡、伯耆に2つだけ、あとその他の城はなくなっていく。その中の一つの代表が、実は若桜鬼ヶ城わかさおにがじょうというお城だと思うんですけども、佐藤さん、少し若桜鬼ヶ城、ご紹介いただければと思うんですが。

○佐藤氏 私、若桜鬼ヶ城の指定にかかわったんですけども、そこもやはり、戦国時代の城が石垣でつくりかえられていくというような、ちょうど中世から近世初頭にかけての大きな転換点に位置する城跡ということで研究がなされているところです。そこも、どのように活用していくのかということで、今、一生懸命、担当の方々が取り組まれているということです。そういったところの調査研究が、鳥取県は、県がやられた詳細調査以後に取り組まれたということで、まだ始まったばかりといった感じなんじゃないかなというふうに思っております。

今日中井先生のお話を聞いても、米子城にもこういった、何かまだまだわからないことがあるっていうことを聞いて、非常に興味深く受け取ったというところでございます。

○中原氏 ありがとうございます。

ここから本格的なお話に入らせていただきたいと思います。まず、お城の魅力、米子城の魅力を考えたときに、中井さんからは、実は「隠れてなんかいないよ」というお話があ

りました。一般的にお城のイメージは、姫路城のように天守閣があって、高い石垣があって、水濠があってというふうに思ってしまう。それに比べると、米子城って「無いじゃないか」っていうところがあると思うのですが、実は先ほどの中井さんのお話の中で、石垣がすごくおもしろいというお話がありました。

その石垣なのですけれども、先ほど使われた絵図ってというのは、修理のときの絵図ということになります。これらから、いろんな時代の石垣があるという話だったのですが、私自身の感覚からすると、比較的古い段階の石垣が残っているのではないかとということが気になっております。そんなに後の手が入っていないのではないかと。それと、枡形。現在の米子城を見るとき、最初に見る枡形が、ある意味シンボルというふうに思っているのですが、これは実は後からつけ足したのではないかとというようなお話もありました。

こうした石垣の魅力を、今後もっと見ていくためには、中井さん、どんなことをこれからしていけばよろしいのでしょうか。

○中井氏 石垣って上から見えないんですよ。この下が石垣やんていって初めてみんな気がつく。例えば飯山なんていうのは、もう全然、今、竹やぶで見えないわけですよ。ですから、やっぱり石垣が見えるような整備をしていかなければいけないし、それから、石垣はやっぱり崩れます。特にそれは樹木の根っこがどんどん入り込んで崩れていくものが非常に多いわけですので、やっぱりそのあたりをきちっとしていかないと、オリジナルがなくなってしまう。もちろん今、全国で石垣の修理っていうのが行われているわけですが、昔ふうの技法で直そうっていうのが、今、もちろん文化庁さんもそういう指導をされているわけですが、これ、昭和30年代、40年代なんてひどかったんですよ。石垣なんて積み直したらいいやっていうんで、全然違う石垣ができ上がったり、石と石の間にコンクリートが入ってた。でも石垣もやっぱり技術じゃないかということで、近年はやっぱり寸分たがわぬ石垣に修理をしていきましょうってことになってるんですけども、だけど、修理はやっぱり修理なんです。オリジナルをいかに残すかっていうのがすごく大事なことで、今、樹木をきちっとしておかないと、石垣が崩れたりするっていう可能性は大きいと思います。

それから、まさにこれ飯山行ったときに、どっから下りるねんっていうくらい木が茂っていたのですが、何とかこれだけ撮れたのですけれども、これがやっぱり見えたら壮観なのだろうとかね、あるいはさっきの登り石垣も全体が見えたら、もっと壮観になるんじゃないかという、そういう石垣の見どころ。

それから、もっと簡単に言えば、二の丸のあの石垣なんていうのは、草をちょっと刈ってやったら見えるわけですね。僕の先輩の方でね、場所は言えませんがね、ツタを全部刈り取ったら上司に大目玉を食らってね、ツタが絡まっているのが石垣やないかって

いって、よかれと思ってやったことで上司に大目玉食らったっていうやつがいるのですが、これも僕はやっぱり見えた方が圧巻なのだろうなというふうに思うのです。ですから、簡単なことだとは思いますが、まず下草なんかを刈っていくっていうような作業が大事なのかなと思います。

○中原氏 石垣なんかみんな同じじゃないかというふうに思われるかもしれませんが、今日のお話でも、いろんな石垣の積み方の手法もありますけれども、それがどんなところに使われているのか。そういうものも含めて見ていくと、そのお城の成り立ちがわかっていくというようなことが大変おもしろい要素なんじゃないか。まず米子城に関しては石垣というものの魅力を、もっともっとわかる形にしていかなければいけないのではないかなというお話であったと思います。

次にもう一つ、ありし日の米子城といいますか、そういうことを考えたときの大きな魅力が天守閣です。大天守閣と副天守閣あるいは四重^{やぐら}櫓と呼んだりもしますが、この2つの櫓を持っているということが非常に注目されるのではないかなと思います。

私、手元に『週刊日本の城』という本を持っておりますけども、この本の中で米子城天守、特異な形をした大・小天守ということで、復元CGをつくっておられます金澤さんに米子城の天守、副天守等の城郭建物の魅力、評価っていうようなところをお聞かせいただきたいと思います。

○金澤氏 CGを、4枚目ですかね、出していただいて。やっぱりお城というと、まずは天守ということで、今日は簡単に天守のお話をということなんですけども、現在石垣しかないんですが、私の頭の中を出すとこんな感じです。天守が2つ建っているように私は見えるんですね。

建築学から見て米子城を評価すると、ひと言で言うと、建築年代の異なる2基の天守が建っているというのが米子城のいちばんの特徴ではないかと、私は思っております。

ざっとこのCGを説明しますと、左側が、吉川が1590年ちょっと過ぎたぐらいに建てた天守であって、右側が1601年ごろに建てた、中村の天守であるというふうに思われます。実際、建物を復元してみると、この違いが、たかだか10年ほどの違いなんですけども、その10年の中で築城技術というのが急激に上がりますので、この10年でもものすごく建物の違いが出るんですね。左側の天守が、まず1階平面がすごくゆがんでるんです、変な五角形をしているんですね。右側はきちりとした長方形をしていると。また、下の方を見ますと、左の天守は石落としが1階の角に2つついてるんですけども、右側の天守は石落としが隠して意地悪に2階についてるとか、そうしたちょっとデザインの違いが出ていたりするわけです。

もうちょっといきますと、左側は吉川ということで、いわゆる秀吉側、右側は中村とい

うことで徳川方、ということで相反する、敵対する武将が建てた建築年代の異なる2基の天守が建っているというのは、これが米子城の大きな特徴だと思っています。普通天守が2つ以上あるのは、例えば姫路城は4つありますし、松本城だと3つありますし、これは珍しいことではないんですが、建築年代が異なった、違うデザインの、違う技術のものが建っているという事例は松本城と熊本城ぐらいしかありませんので、その中で米子城が位置づけられるんじゃないかなというふうに思っております。

ただ、先ほどの中井さんのお話で、両方とも吉川じゃないだろうかというお話が出てきて、ううん、それはちょっともう一度考え直さなきゃいけないなと。今から3部で、2時間ぐらいいただけたら、またお話が楽しめるんじゃないかなと思うんですが、そうした、まだまだ専門家の意見も違うといったところなんかも、まだまだ米子城の魅力があるんじゃないかなというふうに思いますね。

○中原氏 ありがとうございます。

ロビーの方でも副天守の模型であるとか、いろんなパネルとかをお示しいただきました。建築年代の異なる2基の天守というところ、この辺は、中井さんは特にご意見ございませんか。

○中井氏 僕は建築年代が異なるっていうのは、さっきちょっと金澤さんとしゃべったんですが、天守台の位置がすごくへんでこなんですよ。この古い方の、要するに左側の四重櫓っていうか、四重櫓は何か本丸の出べそみたいにぽこっと飛び出てる。それに対して大天守の方は非常に安定した形をしている。金澤さんとお話をしてたら、いわゆる四重櫓の方は、深浦の方から見るということではないかと。これすごく大事なことで、やっぱり吉川の天正19年、僕は米子築城というのは、海の城という意識がやっぱりすごく強かって、深浦が正面の可能性が非常に高いと思うんですね。そのときにつくったのが、実は僕、この四重櫓の天守ではないかなというふうに思ってるんですね。その後、慶長、恐らく3、4年ぐらい、もう関ヶ原直前ぐらいに、今度は陸側として、要するに東から攻めてくる可能性、徳川を想定すると東の想定ということで、だから僕は、吉川前期、後期みたいに、米子城っていうのは吉川前期と吉川後期があっというかなというふうには思っているんです。だから、そういう意味では、やっぱり僕も同時期ではなくって、時代は少し違うんだろうと。ただ、吉川の後期と、中村がつくったというのは、もう本当2、3年の違いなので、これをどう議論していくかっていうのはおもしろいとは思いますが、僕自身も同時代では決してないとは思ってます。

○中原氏 米子城の古写真出ますかね。有名な米子城の古写真です。これが深浦の方から見た写真で、明治11年ごろの写真ということになっています。この右手前に石垣が少し見えて、ここが副天守の位置で、副天守がもう先に取り壊されている写真と言われてお

ります。このように深浦から見る時、前の方に副天守がぼっと見えるという意味では、今日中井さんからお話のあったお城の正面がどこかという議論で、深浦側というののもかなり重要な意味があるのではないかなというお話だったと思います。

お城の話に戻りたいと思いますけども、中井さんに質問が来ておりまして、「海の城ということの意味を教えてくださいませんか」というような質問ですが、お願いできますでしょうか。

○中井氏 実は大変おもしろいのは、僕ら今、海城^{うみじろ}っていう言い方をするんだけど、例えば「正保城絵図」っていう、江戸幕府っていうか、徳川幕府が各藩に提出を命じた正保年間の城絵図っていうのが今、あれは内閣文庫かな、にあるんですけども、三原城なんか、僕ら海城、海城って言ってるんだけど、見事に平城^{ひらじろ}って書いてるわけですよ。だから、海城っていうのは割と現代的感覚で言ってるんで、当時は恐らく平城っていう意識だろうと思うんですが、海に面するっていうのはやっぱり水軍っていいですかね、城下っていうか、城のすぐ下まで船を着けることができるっていう利点があると思います。例えばもっと慶長ぐらいの典型例で言いますと、広島の大竹っていうところにある亀居城^{かめいじょう}なんていうのは、大手が海の方に向いている。あるいは伊勢、サミットやらある伊勢志摩の鳥羽城っていうのも大手は海に面しています。だから、船で来るっていうことを意識しているお城なんだろうなと。それが江戸時代になると、全部城下が当然陸地側になって、こっち側を正面に描いてしまってるんだろうけれども、私は、吉川っていうのは、天正19年のときは、軍船っていうか、自分たちが使える水軍の船がすぐ城の下まで着岸できるっていうために、こういう海際につくったんだろうと。

もう一つつけ加えると、米子の場合は、さらに海だけではなくって、山城であるんでね。海城と山城が合体してるっていうのが、例えば三原とか、広島とか、今、言いました大竹の亀居なんかはやっぱり山と海なんですけれどもね、そういう違いが鮮明に出てきてるのではないかなというふうに思いますね。

○中原氏 ありがとうございます。

お城の魅力という意味で言うと、山城なんだけれども、海に接しているということで海の城というところが米子城の大きな魅力ではないかというお話であったと思います。

金澤先生のお城の天守閣、後半の方で復元の話が必ず出てきますので、そちらの方は少しお待ちいただきたいというふうに思っております。

次に、米子の城下町の特色と見どころというところに話を進めさせていただきたいと思いますが、城下町に行く前に、ちょっと舌の滑りを滑らかにするために、国田さん、質問がきてます。「小説にもあった米子城騒動の真相はいかに、横田内膳^{よこたないぜん}は正義か悪か、とても興味あります。どう思われますか」という質問がありますが、これをちょっとプロロー

グでお願いできますか。

○国田氏 最初にそれでしょうか。

○中原氏 最初にそれをお願いします。

○国田氏 横田内膳は中村伯耆守^{ほうきのかみ}に殺害されたわけですがけれども、理由は、横田内膳は自分のえこひいきばかりをするとか、それから自分だけ私腹を肥やすとか、いろいろなことを言ってますけれども、それでしたら、1人の誰かが横田内膳を殺害すればいいことであって、中村伯耆守がわざわざ手を下すことはないと思います。ですから、これは中村家における権力争いというか、政策に対する違いじゃなかったかと思います。中村氏というのは元来、武力派です、武断派です。ところが、それに対して横田内膳というのは経済政策を中心にする経済派です。簡単に言いますと、加藤清正^{かとうきよまさ}、福島正則^{ふくしまさのり}に対して石田三成派^{いしだみつなり}と反りが合わんとというようなことで、結局それが横田内膳を肅清されるような結果になったじゃないかと思います。

ですから、横田内膳の殺害された後、横田内膳の息子の横田主馬が家に立てこもったときに、約200人ばかりの侍がそれに参加したと。それはなぜかという、横田内膳は主君のために、中村家のためにいろいろ尽くしたけれども、何で殺されなければならなかったかと、けしからんという、義という、武士の義ですね、そういうものの気持ちがたくさんの人を集めたじゃないかと思います。ですから、これは、私は一種のお家騒動だというぐあいに解釈しております。

○中原氏 ありがとうございます。

それでは、早速、城下町のお話を伺いたいと思うんですけども、「米子の町というのは城下町だったかもしれないけれども、商人、商業の町である。だから、城下町の名残っているのはそんなにないのじゃないか」というご質問がありますので、国田先生、城下町米子の特色と見どころということでお話をいただけますでしょうか。

○国田氏 宝永7年の地図をお願いします。本日雪が降っておりますのに、たくさんの方がお集まりになりましたが、大半の方は米子の城に興味があつて来ておられるんじゃないかと思います。城下町というのは大したことはないじゃないかなと、こういうぐあいに思っておられるかもしれませんけれども、私は城郭、城だけでなしに、町も一体化したもので考えなければならないじゃないかなというぐあいに思っております。

これをちょっと見ていただければわかると思いますが、青いところが、ちょっと指し示すわけに、あっ。これが内堀です。これが外堀になりますが、この内堀のところは、内堀のこっちの方が、ご存じのようにお城になります。ここが先ほどいろいろ話が出ましたが、二の丸、こっち側が三の丸ですがけれども、三の丸には何もないような感じがしますがけれども、そこにはたくさんの建物が建っておりました。例えば三の丸には16ほどの米倉があ

りましたし、その米倉は、明治以後は松江の監獄の分庁舎といいますか、監獄になったりしております。

それから、これが内堀ですが、これが外堀になります。内堀も、それから外堀も埋めてしまっております。特に内堀の方は、明治30年代に埋めて水田になったということになります。私の子供のときには今の全日空の前、それから湊山球場の前の辺にはまだどぶ川があったような感じがしております。

それから、この外堀の方も、町の裏を通ってますこの外堀ですけれども、その外堀も昭和の40年ぐらいには埋め立てられまして、ほとんど道路になってまして、現在は加茂川が尾高町の近くからこう流れて、ここの後ろだけが、何といいますか、米子の堀の形を残しておるような感じになっております。

米子の町はどういうぐあいになってますかという、ここにお城がありまして、ここ内堀と外堀の間を丁^{ちよう}といまして、ここだけに侍が住んどったわけです。例えば今の合同庁舎があるようなところは東丁、それから医大があるようなところは西丁、それから賀茂神社があるところが宮丁、それから現在市役所があるようなところは中ノ丁といいますが、特に山陰歴史館、私は山陰歴史館に勤めておりますので、あそこは五十人丁といいますが、昔の人はなまって「ごじゅうにちよう」と言いますが、そこは大体50人の鉄砲足軽が住んでおったからそういいます。ここの丁というところは、鳥取の方から米子に派遣された侍、これが正式な侍ですけれども、これを米子組士といいますが、これが大体80人見当、それから、荒尾さんの家来が60人見当、それから、50人の鉄砲足軽で、総勢、せいぜい200人ぐらいしか戦闘員はいなかったじゃないかなと思っております。ですから、簡単に言いますと、米子は鳥取とか松江と同じような侍の町でなしに、侍の町ではない。じゃあ、何の町かという、多分町人の町ではなかったかなと、こう思います。

この道ですけれども、この真つすぐ、ここんところご存じだと思いますが、これが旧山陰道です。旧山陰道で、普通、法勝寺町のところに、私なんか子供のときには、子供っていうとまあ随分、60年ぐらい前ですけれども、あそこにはモナミというダンスホールがありましたので、私たちはモナミの角といいますが、モナミの角から西の方へ行く道、我々は普通商店街といいますが、あれは昔の人はナカミチと呼んでおりました。法勝寺町、それから紺屋町、紺屋町というのは主に染物屋さんがおったわけです。それから四日市町、四日市町というのは戸上城からこっちに移したものです。それから東倉吉町、西倉吉町、それから尾高町、それから岩倉町、この町は、ご存じのように、全部伯耆の国の城下町から人を集めた名前を使っております。

ところが、その先に立町と、それから灘町というのがあります。東側と西側とでは町名が違うので、私、何でこんな名前が違うんだらうかな。何でこれがひっついてないんだらう

うか、直線的に。何でだろうかなと不思議に思っていました。立町の「立」という言葉は、昔の貴族が上に載せます帽子、烏帽子ですね、あのでっかいのは立烏帽子といいます。それから現在相撲が始まっておりますが、横綱の行司をするのは立行司といいます。「立」というのは重要とか中心というのです。そういう意味だと思います。縦があれば当然横がありますので、昔は灘町の方を横町と呼んでおりました。立町と横町というのは、多分古い米子に城ができる前からあった中世的な町、非常に古い町でなかったかと。米子の起源をあらわすような町がそこではなかったといいます。

それに対して法勝寺町からずっと来ました尾高町とか四日市町とか岩倉町、そういうのは中村氏か、それから吉川氏のときに伯耆の国から人を集めてつくった町なんですね。ですから、新しい町と古い町をひっつけるのがどこかといいますと、岩倉町と、それから立町の間の中ノ棚曲りという、50メートルのほどの横道みたいなものあり、あそこで直線がぐるっと曲がっております。そういう意味合いで、その中ノ棚曲りというのは、中世的な町と、それから新しい近世的な町を結びつけるような、非常におもしろい構造をしていると、そういう町だと思います。

今日中井先生の方が言われましたが、搦手門ですね、あそこを、立町のところからずっと出た中ノ棚橋という橋があります。そこに行けば直線的につながると思います。ですから、先ほど中井先生が言われたように、搦手門が昔は大手門じゃなかったかと言われますが、それは古い立町、これが古い町ですので、それにつながる、これがメイン道路ではなかったかなと、私はそういうぐあいに考えております。

○中原氏 じゃあ、中井さんの説には賛成されるということですか。賛同者が出てきました。

先ほど佐藤さんは、「ブラクニタ」というふうに言われましたけども、国田さんの研究で米子の町並みというものの、いろんなおもしろさがだいぶわかってきたようでございます。現在もされていると思いますけれども、どなたかご案内の方がいて見て歩けば、どんどんおもしろさがわかってくるのではないかと思います。

質問の中に整備にもかかわるのですが、「米子城はまちづくりの核となるのはよく理解できるが、まちづくりとして旧市街地の歴史的風致を生かすためには、まず旧城下町としての町並みを知ることが必要か」と思います。そのための方策は？」ということがあるんですが、金澤さん、建築の立場で見て、城下町の名残のある建築とか構造物とか、そういうのがありましたら、ご紹介いただきたいのですが。

○金澤氏 ただいま私の研究室で米子の城下町も調査をしているんですけども、ざっと米子の町の中には大体3,000軒ほど家があるんですが、その中で約700棟、まだ町家が残っております。大体明治から昭和の初期にかけての町家が残っております。

○中原氏 写真がありますかね。

○金澤氏 何か出していただけますかね。ざっと簡単に言うと、25%残ってるということで、まだまだ4軒に1棟、町家が残っているというのが米子の町の特徴ですね。大体地方の城下町に行くと、まずは空襲で焼けてしまうか、戦後の開発で失われていく中で、米子の城下町はまだ町家そのもの、建物そのものが残ってるっていうのが一つの大きな特徴だと思います。建物が残るということはやっぱり街区もまだそのまま残っているということで、これは今後、早急に調査をしなきゃいけないというか、最近になって年に5棟ぐらいずつ町家がどンドンどンドン町の中から消えていっていますので、そうしたのも早く調査をしなきゃいけないなということで現在研究を進めております。

○中原氏 いくつか写真でご紹介いただけますか。

○金澤氏 そうですね、米子の町家の代表的なもの、ちょっと写真で挙げてますが、一つは、左上にあります後藤家ですね、米子の町家の中でいちばん古い、1700年代の町家ですね。あと文化財に登録されておりますのが右上の坂口家ですね。最近ちょっと立派な町家が1個壊されたんです。糶町にありました景山屋という大きなこうじ屋が昔残ってたんですが、取り壊されてしまいました。町の中、大分様相が変わってきていますので、現状記録という部分と、できれば保存という部分なんかも努めていきたいなと思っております。

○中原氏 ありがとうございます。

地震の後、加茂川の土蔵群のあたりも大分空き地ができてしまいましたけど、まだまだ歴史的な建物が残っておりますので、それらが残せていけたらなと思います。

そうしましたら、魅力を「探る」の方は、お城そのものの魅力、それから建物、天守閣の魅力、それから城下町というお話を聞いてきました。実は質問が、魅力もそうなんですけど、保存活用のご質問がたくさん寄せられておまして、米子城をどう保存活用すべきか、「磨く、楽しむ」に話を進めさせていただきたいと思います。

驚いたことに佐藤さんも中井さんも樹木のお話をされました。これについても質問がたくさんきております。ちょっとお待ちくださいね。あれどこ行ったかな。

その中でストレートな質問がありまして、佐藤さんにですけども「史跡内の木を切ることはできるのですか」という質問があるんですが、佐藤さんいかがでしょうか。

○佐藤氏 それはできます。ただ、どういう影響が起こるかということもありますから、きちんと、法律的には市の許可で伐ることができません。どの木をこういうふうにとって、計画的にやっていけばいいんじゃないかなと思います。

○中原氏 樹木に関しては、米子城跡は、お話にもあったように、現在荒れている感じがある。下から見て単なる山にしか見えない。町全体に風格を与えるということで、米

子城の樹木管理ということについて、質問といたしますか賛同も寄せられています。「現在、米子城山は雑木林になって、城跡としての価値観を損なうものと考えます。そもそも城とは軍事拠点であり、裸山であったはずです。今後の保存活用で雑木林を一掃する必要があると思いますが、見解を伺います。」裸山であったってということも含めてなんですけども、中井さん、このあたりのところはいかがでしょう。

○中井氏 裸山であったかどうかというのは極めてまた難しい問題だと思いますね。

それから、例えば彦根藩なんかでは、もう江戸時代に松を植えろっていう命令を出していますから、松は植わっていたはずでありますし、先ほどちょっと天守の古写真が映ったと思いますが、あれ明治の初めの写真ですが、もう天守を覆い尽くさんばかりの木が植わっています。それはやっぱり、決して裸山ではなかったんだろうということだと思いますね。彦根城の、さっき「御城内御絵図」なんかを見ると、山切岸ってということで、山の斜面を全部切ってるんですよ。それはやっぱり木は生えてなかったと思います。ですから、どちらかという、全く生えてないということではなくって、やっぱり維持管理されてるってことだと思うんですね。生えているところと、それからここは絶対に軍事拠点として生やしてはいけないところってというのが、これはもう明確に維持管理されていたのが、明治以降、そういう維持管理が実はなくなっちゃって、繁茂する状態になってしまったんだろうというふうには思います。

○中原氏 ありがとうございます。

ですから、裸山にする必要があるのではないかということもあるのですが、ここで言われているのは、雑木林を一掃する必要があるということを書いておられますので、樹木をちゃんと選んで管理をしていくということではないでしょうか、佐藤さん、いかがでしょう。

○佐藤氏 美山というふうにしよとしたわけですね。私はその精神を引き継ぐべきだというふうに思います。城の絵ってというのは、この平面図なんかにはほとんど木が出てこないんですね。けども、先ほど中井さんが説明されたように、明治の初め、写真が出てくると、明らかに江戸時代に植わってたような木がやっぱり写ってるんです。ですので、それがいつごろから生えているのか、それは意図的に植えたものなのか、実生の木なのかってというようなことも、絵図がいっぱい残ってますから、そういうことを研究して、そしてコントロールしてくっていか、それは遺構を守るためにも、講演でもお話ししましたように、要するに災害から守るためにも必要なことで、要するに放置と美山は全然関係ない。我々がやるべきことは、本当の美山をつくっていくことだっていうふうに思うんですがね。それは景観の問題でもあるしということですよ。

○中原氏 そうすると、単なる史跡とかお城とかっていう立場だけじゃなくて、城山の

自然というのを愛されてる方もたくさんいらっしゃると思うんですね、そういう方たちと一緒にやっていけるということですね。

○佐藤氏 海城、山城、これはやっぱり自然的な要素があるわけですから、軍事的な拠点であるとともに、自然の山を使ってるわけですね。ですから、その調和を図るのが我々の仕事なんじゃないかなと。記念物っていうのはそういう自然と、自然の記念物があれば、文化的な、我々の遺跡っていうのもあるわけですね。それを一緒にやってのが日本の文化財保護ですので、これは地域において、皆さんと一緒にそれをやってくべきじゃないかなと。どこでも木を伐ると、これは残した方がいいんじゃないかっていうような運動が起こるんですよ。それはやっぱり十分な説明をして、木のためにも木を伐らなきゃいけないってことがあるんですよ。植物の先生はそう言ってます。密植してるとだめなんですよ、木のためにも。衛生的じゃないとか、栄養的じゃないっていいのか、そういうことが言われてるんですね。

○中原氏 ご質問というか、ご意見の中にも自然植生の植樹かな、「その森により防災、命を守る機能を持ったエリアを望みます」というようなものもありますので、そこら辺のところは、ちゃんと話をしていきながらやっていければいいんじゃないかと思います。

また、ご質問の中に、内堀の話がありまして、今日のお話にもありました。内堀というのがまさしくお城と、国田さんのいわれる町の間を区画するところなわけなんですけれども、「内堀は、場所はどこにありますか」というようなご質問。それから、「内堀の発掘調査をやったらいいんじゃないか」「内堀を再現した方がいいんじゃないか」というような内堀に対する質問がいくつもあります。その点はどうでしょうか。佐藤さん、お願いしますか。

○佐藤氏 この左の図の青いところですね、これが内堀ですので、ちょうど湊山球場ですか、その一角がかかっているところですね。あとは民地だと思いますが、その部分も民地ですけれども。可能なところは、これを全部掘り下げてしまうと、水をたたえるのかとか、維持をどうするんだというような問題がありますので、その辺も、どこまで掘り下げるかっていうことは研究していかなきゃいけないと思いますが、私はやはり城郭の構造を考える上では、内堀というものは非常に、決定的に重要じゃないかなというふうに考えています。

○中原氏 今、多分時代劇での、テレビドラマとかを見ると、大概出てくるのが、中井さんの住んでおられるところの滋賀県の近江八幡の景色じゃないかと思います。堀端みたいな雰囲気、その横をたくさん人が歩いている映像は、だいたい八幡堀がロケに使われていると思います。あの八幡堀も、一時期は埋め立てよう、埋め立ててしまおうっていう話もあったんですけども、いや、そうではないということで残した。それが今はロケ地

としても使われる重要な場所になっているというようなこともあります。内堀についてはこれから考えていけばいいのだらうと思います。当然ながら内堀を全部復元するなんてことは無理だと思いますが、何らかの形で顕在化する、見える形にしていく工夫っていうのはあってもいいんじゃないかと、私も個人的には感じております。

続きまして、建物復元の話に進みたいというふうに思います。

金澤さんに質問がきています。「米子城の天守閣を木造で再建したら、より魅力的な史跡になるのではないかと思うのですが、復元ってできるでしょうか」というご質問。待っておられましたよね、お願いいたします。

○金澤氏 どうかわすか考えていたところですけど、ここで復元は可能かという質問に対して、実際に建てることができるかという解釈の質問になると、これは行政のお話ですので、私の範疇から外れますから、ここではちょっとかわしておきまして、復元できるかということ、復元研究できるか、もうちょっと言葉を濁すと、どんな建物が建っていたか正確にわかるか、もうちょっと話をいくと、どんな資料が残っているのか、ちゃんと資料があるのかという質問に置きかえてみますと、米子城にはまず一つの古い古写真が1枚ありますね。これは大天守のちょっと横を写したものです。あと簡単に絵図が数枚残っております。こんなような絵から、まず大天守の方、中村天守の方に限っては、外観だけわかるんですね。外観だけはある程度わかるんですが、中が全然わかんないですね。中の資料は全くないんですね。どこに柱があって、どんな間取りをしてたかっていうのが全く中村の天守に関しては全然わかんないんです。

ただし…、次、お願いします。小天守、吉川の天守の方に限っては、先に建てたもので、石垣は壊れたもんですから、たまたま修理をせざるを得なかったわけで、幕末に小天守の方は修理をしたんですね。そのときに修理をしたいという図面がたまたま残っているんですね。これは建てた当時の図面ではなくて、修理をするときの幕末の図面がたまたま残ってたんですね。これをもとに小天守の方は中も外も完全にわかるという特徴がありますね。

実際、ちょっと1枚めくっていただくと、簡単に今の図面をもとに復元図を描くと、中も外も完全にわかるというのが米子城小天守のいちばんの魅力というか、大きな特徴ですね。これを建てるかどうかということは、まあまあ、さておいといて、実際に建物は何が建っていたか、150年前に取り壊された建物が、ここまでちゃんとわかるんだということとは確かにあるということですね。

こうした研究の成果は、ホールを出て右側にパネルと模型で示しておりますので、またよかつたらご覧いただければと思います。

○中原氏 建物復元は、あくまで史跡を整備する手法の中の一つの選択肢でありますし、当然ながら条件もたくさんありますので、なかなかそう簡単には出来ないのですけれども、

やはり見える化することにも意義がある。お城の姿、中井さんは石垣を見ていれば満足なんですけども、皆さんはやはり、多少は建物とかが見えたらおもしろいんじゃないでしょうか。

鳥取城も建物は全く残ってなかったのですけども、今、発掘調査等を一生懸命やって、資料も探して、ちょうど今日の中井さんの話にあった高麗門があって、その後、右に曲がって櫓門があるという大手筋の復元に取り組んでおられます。何年かしたら当時のお城の正面景観が一部再現できて、全体がイメージしやすくなるんじゃないかなと思います。

そんなことも今後取り組んでいけるんじゃないかと思いますが、あえて佐藤さん、このことについて、ご発言いただければと思います。

○佐藤氏 史跡の中に、今はなくなってしまった当時の建物を復元するためには、やはり現状変更の許可を、文化庁長官の許可を得なきゃいけません。そのためには、やはり正確な資料があるとか、そしてそれを建てることによって、この石垣の天守台、石垣とか、そういったものを壊さないようにとかいうような、幾つかの観点がありまして、判断していくことになります。

この、^{きしず}指図っていうんですけれども、こういった詳細な図があるっていうことは、非常に貴重なものではないかなと思います。調査研究をさらに進めていただいて、私は米子城の価値が、本丸のこの天守にあるんだっていうようなことにならないように、それこそ国田先生がおっしゃる、城下町も含めて考えて、そうした上の一つだというふうなことで、ぜひ、金澤先生はそういうことを、城下町の町家の研究とかやられてるわけですけれども、そういう全体の中の一つであるっていうような位置づけをしていただいて、さらにこの魅力を伝えてくと、価値を伝える方法の一つであるっていう観点を忘れないでやってほしいなというふうに思っております。

○中原氏 ありがとうございます。

きっちり釘を刺されましたけれども、あくまでそれは魅力の一つであって、それだけが魅力ではないと。城下町、それから内堀の中の三の丸とか二の丸や本丸のそれぞれに残っている石垣とか、あるいは建物のこととか、そういったことを今後、研究を深めていくことが必要になってくるのではないかというふうに思います。

「磨く・楽しむ」というテーマの最後に、米子城の活用ということでお話を進めさせていただきたいと思います。

先ほど、そうですね、佐藤さんのお話の中に、月見というお話がありました。月見をしたらいいんじゃないか、あと餅つきも自分は好きなんだというお話もありましたけれども、国田さん、米子城の景観ともかかわってくるのですけども、錦海八景とか、中海八景とか、そういう中にお城、城山、湊山って出てきますかね。（発言する者あり）何で出てきます

か。

○国田氏 はあ。

○中原氏 何で出てきますかね、八景の中の。

○国田氏 ほとんど入ってますけれども…。

○中原氏 僕も覚えないんですよ。粟島がね、粟島の秋月だった、秋月だったような覚えはあるんですけども。

○国田氏 はあ、そういうのがあります。ただ、私、あまりそれ興味がありませんで、申しわけありませんけども。(笑声)

○中原氏 ありがとうございます。すっぱり切られてしまいました。私は景観という点では、八景とかああいう感性が好きで……。

○国田氏 すみません、ただ、米子城に対しては、外堀に7つの橋がかかっておりましてね、大工町の辺からは牧野橋、それから昔の大丸のところには福厳院橋ですね。それから今の、昔の明道校のところですね、総合庁舎のところは横町橋、それから山陰歴史館のところには藪根橋、それから天神橋、それから中ノ棚橋、それから京橋、昔は京橋は、魚棚橋といまして、あのあたりには魚町という町もあったわけですけども、そこからお城を見るのがいちばんいい。お城を見させることによって、封建領主の権力構造というものを庶民に思い知らせるというような格好にしておるじゃないかと思います。難しい言葉でビスタっていうんだそうですけれども、そういうような仕組みにいろいろ考えてあるみたいですね。

○中原氏 ありがとうございます。思わぬ方向に進みましたけども、ビスタラインというのは確かにあるんだろうと思います。

あと、佐藤さんのお話の中に、子供たちの声がする城跡にというお話がありました。これについてはどうでしょう。

○佐藤氏 ^{うっそう}鬱蒼としているので、子供たちが安心して遊べなくなってるんじゃないかなと。明るく、下草が生えるような状態にしないと、子供たちは教師が引率しても、そこで活動ができないんじゃないかなというふうに思っています。

それであと、眺望という点でいえば、さまざまなものが見えるわけですから、その意味づけをしっかりと説明することによって、すごい教育ができるんじゃないかなというふうに思っています。

○中原氏 私は米子の人間です。米子でも、この飯山と、新加茂川を挟んで反対側の祇園町というところに中学生のときまでおりまして、米子城跡は私の遊び場でした。枡形のところで、両方の石垣から、石は投げませんがツバキの実か何かを投げて戦争ごっこをしたというような遊び場でした。今、あまり子供たちが、そういうところで遊ぶ姿って見な

いですが、もう少し子供たちが安心して行けるような感じのところになればいいなという気がします。

また、鬱蒼としたという点では、私たちのころだけでしょうか、いつか彼女ができれば、彼女と一緒に城山に登りたいというのがあったような気がします。若干人気の少ないところに行きたいなというのはあったような気はいたしますが、そういうところもお城の楽しみ方の一つかもしれません。

あと、中井さん、いろんなまちづくりという意味では、お城を活用したまちづくりというのは結構あると思うんですけども、米子城の場合に何かこれを使った、活用したまちづくりってあるので、具体的な何かご提案がありますでしょうか。

○中井氏 何か最後にお話をしようと思ったんですが、これだけの方が今日来られてるってことは、恐らくこれだけの方のアイデアがあるんじゃないかなと。私は城跡の活用ってというのは、三位一体っていうふうに住って、それは地域の方々、つまり地元の方々と、それから行政と、それから研究者とが三位一体になって知恵を出し合っていけばいいなというふうに住って、最近ね、滋賀県では四位一体になってきて、地元企業さんが地元貢献ということで、さまざまな人的、あるいは金銭的支援をしてくださるっていうことですね。ですから、これだけの方が恐らくアイデアを持ってたら、恐らく、今日600人ぐらいって先ほど伺ったんですが、年に1回、何かイベントやっても600年やれるんじゃないかなというかね。

例えば今の僕、聞いてて、天守なんていうのも、私は実は復元っていうのはすごく反対派でありまして、今のまま現状を残していくっていうのがいちばんいいんですが、例えばね、一夜城みたいなことできないか。これは滋賀県の佐和山でやったんですが、1人ずつ画用紙に絵を描いて行って、それをぺたぺた張って、足場板にちょっと天守閣を復元したりする。一夜城っていったけど、1週間は展示してたんですけどもね。そういう、これをもとに、みんながやって、何かつくればいいな。

これは尼崎っていうところで、尼崎高校の学生が、やっぱり校舎から布をおろして、こんな天守があったん違うかとかっていうのやってみたりして、つまりみんなで作っていくっていうのが大事だと思うんですね。だから、決して行政だけがやるわけではないっていうね、みんなが何か一つになって、あっ、あんな天守があったんだっていうのが見ればいいし、僕は自分がまだ行政にいたころやったのは、大野点会っていうね、やっぱり城の中でお茶飲もうぜっていう、ちょっとお茶の先生呼んできて、ここなんか大天守でお茶飲めたらいいよとか、いろんなことができると思います。

要するに知恵を、要するにあとはみんなが出し合うっていうね、そういうイベントをしていくっていうのが、まさに中原さんおっしゃったように、楽しむっていうかね、やっぱ

り、僕は城で楽しんでいただくっていうのがいちばんいいだろうなというふうに思っています。ですから、いろんな知恵を、これだけの方がいるっていうのは出し合えるっていうこと、本当に今日はすごいことやろうなというふうに思っています。

○**中原氏** 今日は会場からの質問がすごい数ありまして、とてもじゃないがこなし切れないんですけれども、これだけいろんな関心があって、その中にはご提案もたくさんあります。こういうものを活かしていくという意味では、今、中井さんは四位一体って言われましたけれども、お城の整備とか活用っていうと、佐藤さんが言われましたが、整備してから、さあ、どうしましょうかではなくて、活用していく中からどういう整備が必要かを考えていくということが大切だと思います。そういう意味では、今日を皮切りに、ただ行政がやるだけとか、研究者だけが楽しんでいるんじゃないとか、そういうことではなくて、一般市民の皆さんのご意見も参考にしながら、楽しい活用になっていけばいいなというふうに思っております。

お時間の方が不手際で過ぎておりますけれども、最後に、今日はせっかくこれだけのすごいパネリストが集まっていたので、私の方からお願いをしたいと思います。

いろんな話がありましたけれども、米子城の魅力を一言で述べる。つまり「切る」ということで、米子城の価値と魅力について、それぞれのパネリストの皆さんの立場から迫るポイントを、各人1分で、できれば、画像がある方は画像1枚で語っていただければというふうに思います。

続いてで申しわけないのですが、中井さんからお願いをできますでしょうか。

○**中井氏** 1分ですので、文句なし、登り石垣ですね。これは恐らく新たな、今まで我々は伊予松山と洲本と彦根ぐらいかというふうに思ってたのが、新たに見つかった。これはこれから石垣崩れる可能性もあるので、うまく樹木との、写真これしかないんですよ、もうこれしか撮れないんですよ、現地。だから、みんなで行って、本当はみんなで見たいなというふうに思うんですが、もう文句なし、僕、登り石垣、しびれてしまいました。以上です。

○**中原氏** ありがとうございます。続きまして、国田先生の、何か画像ありますか。

○**国田氏** あの三角形のお願いします。出ましたか。「不来方のお城の草に寝ころびて空に吸はれし十五の心」、こういう歌を歌った人がおります。これは石川啄木が盛岡中学の生徒のときに、学校をサボって、不来方、盛岡城に行って寝転ぶというので、私はやっぱり現在の城山、あそこに草が生えておりますので、あそこで寝転ぶのが夢があつていいじゃないかと思います。金澤先生に悪いですが、私、再建には反対です。（笑声）

そこで本丸、それから中井先生言われるように、石垣は放っておけば崩れると思います。それから二の丸はもちろん、三の丸などは何もないからいいじゃないかなという説もあり

ますけれど、あそこに米倉などもたくさんありますので、それも全部保存して、それだけでなしに、町もひっくり返して、そうすることによって、歴史的風致というもの、景観というものが、祖先から我々が受け継いだものを将来の子孫たちに受け継ぐと、受け渡していくということが大切じゃないかなと思います。以上です。

○**中原氏** ありがとうございます。では、若干分が悪い金澤さん、お願いします。

○**金澤氏** 私の方は、一言で言うと、米子城には資料が残っているということで、先ほどの指図があるということです。世の中の城には、資料がなくて困ってるお城もあるんですね。例えば信長の安土城とか、秀吉の大坂城とか、資料がないために何が建ってたか、よくわかんないんですね。そのかわり、やはり城というのは軍事機密なんで、こういう図面を残さないというところがありますので、その中でたまたま米子城には図面が残ってるって、これは大きな、米子城にとっての価値かなと思っております。

最後に一言、私も中井先生と同じく小学校の四、五年生からお城が好きになってしまって、だめな大人になってしまったという、同じ道を歩んでるわけですが、私は小学校のころから中井先生の本を読んでおまして、今日こうやって一緒に仕事をできたということが今日の私のいちばんの魅力であります。ありがとうございました。（拍手）

○**中原氏** 拍手が起きております。そうしましたら、佐藤さん、お願いできますか。

○**佐藤氏** 私は眺めです。見上げる景色、見おろす景色。海城、山城、空城、米子城。探訪、眺望、食いしん坊。以上、1分です。（笑声）（拍手）

○**中原氏** ありがとうございます。

写真は、ちょっと私の方で用意をさせていただきました。多分手前にあるのが四重櫓の石垣だと思います。そこから米子の町と大山を見た姿だと思います。米子の町が見えること。この逆の反対側になると、錦の海が見えるという、この眺望だというふうに思います。ありがとうございました。

そうしましたら、1時間ちょっと過ぎておりますけども、本日のパネルディスカッションも結びということになります。

最後に、私の方でちょっと今日のまとめでもないのですが、話をさせていただきたいと思います。ちなみに、私のお勧めの画像です。遠見櫓のところの、これは桜なんですけど、この後ろを振り返れば海が見えるという絵でございます。

本パネルディスカッションでは、米子城の価値と魅力ということに迫ろうといたしました。私の力量の問題もあるんですが、わずか60分強という時間ではとても語り尽くせないほどの豊かな内容を各パネリストの皆さんが語っていただきました。本当にありがとうございました。

今日の話のポイントは、隠れたる名城だろうとやはり思います。つまり、米子城の評価というのは、実は専門家の、今日お話がありましたけども、皆さんの間では全然隠れてないよということだろうと思います。それを米子の町の人たちは、どれだけ認識を今までしておられたのかなという気がします。私たちは、特に私の父からずっと聞かされたんですけども、米子の人々は、明治時代に城の建物を薪にして風呂を沸かして楽しんだというようなことを語り継いできました。これは本当にそうなんだろうか。あるいはこの都市伝説のような話が伝えようとしたのは何なのだろうかというふうに思います。米子は商業の町だというふうに言われております。商業で栄えた町としての矜持として、武家支配に対する反発というようなことを語られることも多いんですけども、そういった時代に風呂の薪にするくらいの価値のものというふうに、富国強兵、西洋化という時代の波の中で思い込もうとしたのではないかなという気がしています。明治維新から150年がたちました。これだけの経済発展をなし遂げた私たちが、現在の視点でこの貴重な歴史資産の価値を議論して、再認識すべきだろうと思います。

中井さんからご紹介いただきました「伯耆米子城」という本がこの本でございます。昭和46年の刊行でして、私、中学校のときに買って仲間と回し読みをしたものですが、これ以後、実は伯耆米子城についての評価があまりちゃんとなされていなかったのではないかという気がしてなりません。それが今、市史の編さん事業であるとか、国田さん、金澤さんなどによりまして、新たな研究が進み始めたように思います。

パネルディスカッションの中で語られた提言というのは、ごく一部です。たくさんの皆さんからご提案とかご意見も頂戴いたしました。米子城跡の保存活用の手だてというのが今後とられまして、まさに調査研究に真剣に取り組むべき時期が来たと思っております。その成果は、今日のような形で逐次、市民の皆さんに公開されることで認識を深めていただいて、隠れたる名城から正真正銘の名城・米子城という形と、城と一つにした、核にした、あるいは米子のまちづくりってというのが今後、進められていただければ非常にありがたいなというふうに思っております。

まちづくりの要諦というのは、ない物ねだりではなくて、あるもの探しだと思います。米子の町には何がない、鳥取には何がない、スタバがない・・・という話がありましたけれども、そうではなくて、あるものを探すということが大切だろうと思います。今日のお話にありましたように、私たちは米子城という、他の地域が望んでも得られない宝を持ち、こんな資料なかなかないんだよ、こんなお城ないんだよっていう話が何度も出てきました。こういう宝を持っているということに少し目を向けていただけたらと思っております。今日のパネルディスカッションはこれでおさめさせていただきたいと思っております。

本当は今日のお話しにあった見どころを、あしたのウォークに活かしていただきたいと

強く思っておったんですけど、残念ながら明日はさすがにこの天気では無理ということになりましたので、また春になって、気候のよくなった時期に、今日お勧めのポイントとかに足を運んでいただければと思います。

また、たくさんのご質問、とてもこなし切れませんでした。このご質問をそのまま米子市の事務局の方にお渡ししたいと思いますので、是非ともこれらを活かしていただきたい。さらに第2回、第3回の隠れたる名城米子城を、隠れたじゃない形にするシンポジウムを開いていただければ、皆さま方にもっと楽しんでいただけるのではないかと思います。

本日はどうも長時間にわたってありがとうございました。（拍手）

○司会 どうもありがとうございました。

先生方にいま一度拍手をお願いいたします。（拍手） どうもありがとうございました。